

想い出く中学疾風篇く

●松橋健一

## 入学式

春の日差しの中、ゆるやかな坂を上って行くと、白いフェンス越しに桜の花が満開だった。周りには、真新しい、同じ制服を着た、この春から同級生になる奴らでいっぱいだった。

「こんな連中と一緒になるのか」

自分自身も、こんな連中の一人とも気がつかず、苦々しく腹の中で考えていた。皆一様に母親に付き添われて歩いていった。健一は、ここへ来るのは、三度目だった。一度目は入学試験の時。自分の行くであろう学校に、健一は入学試験まで訪ねたことはなかった。それと言うのも、小学校六年生の時に通っていた、進学塾が校舎を借りていた、東京の進学校を第一志望にしていたからだ。結果から言うと、第一志望は落ち、滑り止めのこの学校に来ることになったからだ。だから、健一にとって、ここに来ることは、大いに不本意なことだった。

まだこの日は、これから起こる様々な事柄の、予感すら感じていなかった。

校舎は鉄筋で、見た目は立派だなと言う印象を受けた。中高一貫校なので、一学年二百人で、六学年およそ千二百人の在校生がいる。卒業までに、若干欠けるのだそうだ。新入生は、講堂に集められた。かなり広い。生徒全員が入れるのではないだろうか。ところが、ここからの記憶が全くないのである。入学式で何をやったのか、誰が話をしたのか。全く憶えていない。おそらく式の後に、教科書をもらった（買った）のだろう。わからない、本当ににも憶えていない。そんなものだろうか。確かに感動はなかったな。

## 登校初日

おそらく初日で間違いはないと思うのだが。担任が教室に来て、なにやら話したのを憶えている。何を話したのかは憶えてはいないが。健一は、一年D組だった。全部で四クラスだった。何だか、そわそわと落ち着かない奴や、ずっと同じコマースャルソングを歌っている奴。変な奴らがたくさんいた。とんでもないところへ来てしまった様な気がしたのは、憶えている。こんな奴らと同級生なのかと不安になったものだ。

副担任の先生もいて、外国人だった。カナダのケベック州の出身だと言った。実はこの学校は、ミッションスクールで、キリスト教団体が経営していた。外国人教師は、皆ブラザーだったのだ。まあ、その日は授業もなく、担任、副担任の話で終わった。

いや、もうひとつあった。学級委員と副学級委員を決めたのだった。そんなもの喜んでやる奴がいるのかと思っていたら、一人ほど手を挙げて、立候補した。変わった奴らだなあと、思ったのを覚えている。委員長は、コマースヤルソングを歌った奴だった。やっぱり変わり者だなあ。余談だが、彼は委員長を辞めた後も、しばらくは委員長と呼ばれていたっけ。

初日は、そんな感じで過ぎていった。何故か健一は数人のクラスメイトと話をしていた、すぐには帰らなかった。副担任のブラザーの先生と話をしていたのだ。これまで外国人とまともに話したことなどなかったからだろう。その時は、もちろん日本語だったが。もうその時点では、クラスの半分以上は帰って行った。

自然と同じ方面に帰る同級生と仲良くなり、さあ帰ろうという時に、担任の久保田先生があわてて戻って来て。

「掃除をするんだった、掃除！」

と、教室に飛び込んできた。だが、半分以上の生徒は、もう校門を出て、帰り道についていた。久保田先生は、いきなり、窓から帰って行く生徒に向かって、

「帰ってこーい！」

と、叫んでいた。そそっかしい先生だなあ。

なんとも慌ただしい一日だったことは間違いない。この久保田先生も、実は転勤でこの学校にやって来て、この日が、初勤務だったのだ。

友だちができた

何となく友だちになっていくのは、初め名前の五十音順で席に座っていたため、「ま」に近い名前の同級生と仲良くなった。その中には、その後、数十年も付き合い仲間ができるなどは、その時は微塵も考えてもいなかった。

そのうちに、だんだんと帰る方向が同じ仲間ができてきた。健一は学校のある駅まで二十分程度かかる、K駅を利用していった。K駅には、接続する電車が乗り入れ

ていて、その電車に乗ってくる同級生も少なくなかった。必然的に朝夕顔を合わせるので、仲間が広がっていった。

学校までの間に、Y駅という大きなターミナル駅があり、大半の同級生はその駅を利用していった。その方面の同級生は、いわゆるお金持ちの家庭が多く、我がK駅利用者は、お世辞にも裕福という家庭は、多くはなかった。そんなこともあったのだろうか、次第にK駅利用のグループができあがっていった。とはいえ私立の学校なのだから、生活に困窮している家はなかったと思うが。まあ、健一の家のようにかなり無理をしていたところは、あったかもしれないが。

### 英語の授業

英語の授業は、日本人教師とブラザーで行われていた。健一はあまり学校のことを知らずに入学してしまったので、近所の公立中学と何が違うのか、わかっていなかった。まず驚いたのは、ブラザーは英語で授業をするのだった。中学一年なんて、英語のアルファベットだってまともに書けるもんじゃない。それなのにいきなり英語で授業を受けなければならなかった。もちろん、難しいところや生徒が立ち往生した時は、日本語でフォローはしてくれるのだが。健一は、早くも中学一年一学期の中間テストで落ちこぼれた。

英語の授業で、L1教室というのがあった。当時流行っていた、ヒアリングの勉強方法だ。毎週、授業の始まる前の朝の時間に、二回このL1教室で、ヒアリングの自習をしなくてはならなかった。当時、まだ我が家にはテープレコーダーなどなかったもので、衝撃だった。マイクまでついていて、発音してないとバレてしまうのだ。ヒアリングの学習をするのに、やむを得ず、我が家でも、一番安いテープレコーダーを買ったのを憶えている。これが、何故か学校でまとめて販売していた。怪しいものだ。まあ、あまり使うことはなかったのだが。

それだけで驚いていたのに、毎週二冊、英語の小冊子を読まなくてはならない。読んだら、確認の意味で簡単なテストがあった。健一は、自分がとんでもないところに来てしまったことを、この頃から感じ始めていた。また、この小冊子が学校の購買部で売っていたのだ。よそでは見たこともなかった。あれはいったい何だったのだろう？

今考えれば、あそこでちゃんと勉強していればなあ、などと思っている。

### 体育教官室

体育の教師は、他の教員とは別に、体育教官室というところにいた。別名、体教。何かとうるさい先生方がいたのを覚えている。学校には、新旧二つの体育館と屋内プールがあった。そのどれもが、体育教官室から見えるようになっていた。一種の要塞である。

中学に入っても、ドン臭い健一は、体育教員には泣かされた。男子校なのだから、まあ当たり前なのだろう。

体育は、一般的な体育の授業の他に、柔道があった。これは選択の余地はなく、全員必修だった。柔道の授業は好きだった。ただ、担当教員の芦沢だけは、どうしても馴染めなかった。これは健一だけではなく、生徒の誰もが思っていたことだろう。弱いくせに、プロレスとかが好きだったので、また、身体は体重があったので、素人柔道では有利だった。体育で良い思い出はそれぐらいだ。後は苦痛の何物でもなかった。

しかし、なぜ体育教師だけが、職員室にいなかったのだろうか？ 今でもそのようなのだろうか。なんとも不思議だった。ただ、体育教員だけは、何故か特権階級のような顔をして授業をしていたような気がする。考えすぎだろうか。

### 怪人？ 変人？

新しい友達が増えてくると、中には変わった奴もいるもんだ。同じクラスのA君だ。背は、健一よりも高く、眼鏡をかけていた。彼もK駅利用者だった。彼は、何にも動じないタイプだった。人目もあまり気にせず、堂々としていた。その彼が変わっていた。

ひとりで廊下を歩いている時、何やら歌の様なものを、モゴモゴ唸っていた。

「屁くがでる、屁くがでる」

なんだ？ 健一には何がなんだかわからなかった。しばらく並んで歩いていたが、さすがに疑問に思っって訊ねた。

「A君、何か歌ってるの？」

「いや、屁がでそうなんだよ」

「はあ？」

そう言うと、A君は教室に入ってしまった。健一には、ただただ衝撃だった。何者なんだろうコイツは。その日から、A君と急速に仲良くなった。健一にもわけがわからないのだが。

また、ある日。A君は、やはり廊下で、

「こんじょゝるまん！」

「こんじょゝるまん！」

と連呼していた。健一も、この時だけは質問は避けた方が良いと判断し、黙っていた。こんな逸話がいくつもあるのが、A君だった。まさか、四十年近く経つ今も、一緒に酒を呑むようになるとは、考えもしなかったが。

#### 放課後

私立の進学校のため、なにかとつまらない決まりがあった。例えば、クラブ活動は週二日までだとか、襟足はYシャツにかからないだとか。また、学校の関係の書籍などを買うときにも、立ち寄り許可を、担任からもらわなくてはならない。当然、学校帰りに無断であちらこちら出歩くなど、もつてのほかだった。

特に、Y駅の地下街などは、毎日のように見周りの教員がうろついていた。

ところが、我がK駅には、さすがに見周りの教員が現れることがなかった。そんなことから、K駅利用の級友たちとは、毎日のように遊んでいた。

その頃、流行っていたアイスクリームの店に、リコリスという名前のアイスがあった。ミントの味なのだが、かなり強烈で、苦味さえあった。三〜四人集まると、じゃんけんで勝負をする。負けるとそのリコリスを食べなければならぬ。ただし、料金は勝った者たちが負担する。負けてもアイスが食べられるわけだ。ただ、いつも店員さんに聴かれた。

「お食べになられたことありますか？」

まあ、そんな代物だった。

文字通り、駅前のアーケードの中を、毎日飛んで歩くように遊んでいた。

そんなある日、午後の四時からテレビで、テレビドラマ「コンバット」の再放送が始まった。家に帰ってからでは、半分は見損なう。悩んだ挙句、当時の改築前のK駅駅ビルの中二階に、電器店があった。そこで観ることにしたのだ。ヘイちゃんとなべと三人でガラスにへばりついて、観ていたのを思い出す。店の主人もわかっていて、ポリウムを大きめにして、ガラス越しでも聴こえるようにしてくれていた。一時間、そこでテレビ観賞してから、家へ帰った。

その電器店の向かいに、アートコーヒーの店があった。面白いシステムで、自身は同じなのに、椅子席よりも立ち飲みのほうが、五十円安かった。「コンバット」観賞が終わると、コーヒータイムになった。かなり早熟だったかな。もちろん立ち飲みだった。

### 夏休みの補習

そんな毎日を送っていて成績が良いわけない。ただ、K駅利用者でも要領が良いのか、夏休みの補習を受ける奴は少なかった。健一は、見事に補習を受けていた。夏休みで、生徒もほとんどのいない学校というのも、なかなか楽しかった。補習なわけだから、授業はわかりやすい。当たり前だ。馬鹿を相手にしているわけだから。よくモリ先生はやってくれたよなあ。もちろん補習なんかやってくれない教員の方が多数だったが。しかし、ここにもツワモノがいて、補習にもかかわらず、居眠りをする奴がいた。大したもんだ。ワキタだ。忘れもしない。元気かな。

そんなある日、夏の補習の帰りだったと思う。何故かひとりで学校から駅へ歩いていた。周りには、誰ひとりいなかった。なだらかな坂を降り切ると、そこが駅の改札口だった。何故だかその日は、駅に入らず素通りして、その先へ進んでいった。いままで、一度も行ったことのない方面だった。何故だったのだろう。今でもわからない。

しばらく行くと、民家の間に、細い路地があった。覗いてみたが、よく見えなかった。大した考えもなく歩いて行くと、二段くらいの階段があり、入口の様なものがあった。棒が一本立っていた。それだけ。そのまま段を登り中へ入って行った。

するとどうだろう、見渡す限り、広大な緑の芝生だった。ポツンポツンと、パステル色の住宅がいくつも見えた。米軍住宅だったのだ。フェンスで張り巡らされた

住宅地だ。どうも、健一は、裏口と言うか通用口みたいなどころから、入ってしまったようだ。テレビドラマで観たことのある、芝刈り機なんかが無造作に置かれている。それまで気がつかなかったのだが、まっ白いワンピースを着た女の子が、庭らしきところで遊んでいる。健一は、何か見たいいけないようなものを見てしまった様な気がした。実際には、女の子は豆粒くらいにしか見えなかったもので、向こうからは気がつかれてはいないのだが。ともかくここにいてはいけないと思い、健一は慌てて引き返した。ほんの一分くらいだったのだと思う。だが、健一には、何時間にも感じられた。

その日から健一は、あの豆粒のような、まっ白いワンピースの女の子が忘れられなくなった。

ただ、いつの間にか、そんな記憶もどこかへ置き忘れてきたようだったが。

### お迎え電車

学校の最寄りの駅から、三つほどK駅よりにターミナル駅があった。その駅は、その駅を発着する電車があり、他の線も乗り入れていた。健一たちは、その駅発の電車がホームにいと、乗り換えて座って帰っていた。そのまま乗っていても、十五分程度でK駅に着くのだが、なんとなく座って遊びながら帰った。学生鞆をひっくり返して、ゲーム盤のように、その上で様々な遊びをしながら、K駅まで乗って行った。Y駅利用者は、Y駅が、そのターミナル駅の次なので、当然乗ってくるわけがなかった。いわゆるK駅連合だけが乗っていた。と言うよりも、健一グループ達だけが乗っていたのかもしれないのだが。

学校帰りの時間なので、まだ車内はガラガラだった。走り回ったり、寝そべったりと散々だった。居心地が良いものだから、健一たちは、お迎え電車と呼んでいた。車掌や駅員によくもまあ怒られなかったもんだ。朝は下り、帰りは上りなので、電車はいつでも空いていたのだが。

### 夏のキャンプ

中学時代には、三年間、夏休みに猪苗代湖へキャンプに出かけた。学校所有のキャ



ンプ場で、他には誰もいない、快適なキャンプだった。だいたい四名でひと班になり、テントで過ごす。二泊三日なのだが、結構楽しかった。湖だが水深が深いので、あまり泳がなかった。その代わり、ボートやゴムボートで遊んだ。今思うと問題があるんじゃないかと思うのだが、沐浴と称して、湖で身体を洗ってた。それも、石鹸を使ってだ。二百人全員でだ。のどかと言えばのどかなのだが、どうなっていたんだろう。

炊事は、朝晩と飯ごう炊飯だった。この時に覚えた薪での焚きつけが、今でも役に立っている。ありがたい事だ。メニューはあまり憶えていないのだが、カレーだけは憶えている。あとは何を食べていたんだろう。

確か二年の時だったと思うのだが、委員長と班が一緒になった。カレーを作っていた時だった。体教の芦沢がやってきた。我が班のカレー鍋を見て、

「そろそろいいぞ。煮詰まるからな」

と、相変わらずの調子で小言を言った。それを聞いた委員長が、

「いいんです。煮詰まったカレーが好きなんです」

と、やらかした。ムツとしたのだろう、芦沢が言い返した。

「べたべたになるからな」

「べたべたになったカレーが好きなんです」

委員長と芦沢の掛け合いが可笑しくて、声を出して笑ってしまった。芦沢は、何も言わず他の班へ行ってしまった。痛快だった。さすがは、委員長だ。怒られなくてよかった。

昼飯は、日の丸弁当に鯨の大和煮缶詰と決まっていた。それを持って、いろいろと遠足に出かけるのだった。鯨缶とは、時代を感じてしまうなあ。

### 写真部

クラブ活動は、中学三年間を通じて、写真部だった。まあ、途中で転部する奴はいなかったが。ただ、クラブは、中学高校一貫だった。先輩と言っても、中学一年生から見たら、高校三年生は、もう大人だった。ただ、学校の性格上、皆、高校三年生になると、部活は辞めていた。大学入試に専念するためだ。クラブ活動は楽しかった。小学校から遠足の写真などは撮っていたが、自分で現像するわけではなかつ

たので、本当に楽しかった。当然、こんなに楽しい事を、週に二日で終わるわけにはいかなかった。写真部は、暗室に入ってしまったえば、誰だかわからない。毎日のように暗室にこもっていた時期もあった。とにかく楽しかった。

写真部でも、特にカシワと仲良くなって、鎌倉などによく撮影に行ったもんだ。なに、撮影と称して遊んで歩いていただけなのだが。その当時、撮影した鎌倉の写真など一枚も残っていないのだから。

いまだにフィルムが残っているのは、中学時代のキャンプや修学旅行のものが大半だ。懐かしい。もの凄くたくさんある。それも、みなモノクロフィルムだ。今は、引き伸ばし機もなくなって、どうしたらいいのか途方に暮れている。今となっては、健一の貴重な財産なのだが。

### カト研

健一は、勉強以外の事は、学校でもいろいろと活動していたんじゃないだろうか。そのひとつに、カトリック研究会、通称カト研がある。毎週一度、放課後に聖書について学ぶのである。先生は、ブラザー。英語の先生でもあった。そこには、三人くらいしか所属していなくて、こじんまりとした、好い感じだったのだ。みんなで聖書をよんで、聖書の中のとえ話を解説してもらい、キリストは、いや神は、何を人間に与えようとしているのか。みんなで考えるのである。なかなか高度な研究会だった。こういうのには、積極的に参加し、学習する健一だった。もともと神秘的な事が大好きだったのだから、つまらぬはずはない。それに、キリストの伝記や宗教映画も、ビデオでいくつも観せてもらった。カトリック研究会だけは、熱心だった。決してサボらなかつたな。

### 赤点

まあ、学校生活は、楽しい事ばかりじゃない。本来は勉強を目的とした場所だ。それも私学の受験校だ。これには、健一は閉口した。いや、健一が間違っているの、学校は目的を果たそうとしているだけのことだ。

当然のことながら、試験がある。百点満点中、六十点以上取らないと、赤点とな

る。そして、赤点が二つ以上になると、落第だ。中学でも問答無用に落第させられる。健一はと言うと、赤点の常連だった。ただ、ひとつなのだが。この赤点が消えないう。数学と英語、これが難敵だった。中間試験などで、赤点がふたつになると、さすがに慌てる。真面目に勉強をしている、クラスでもトップにいる奴らでさえ、百点を取ることは、至難の業だ。なのにな。ただひたすら遊んでいた健一が、おいそれと八十点や九十点が取れるわけがない。一学期だと、前出のように夏休みに補習をしてくれる。しかし、二学期三学期は、そうしたものが無い。今思えば、落第しなかったのは、奇跡としか言いようがない。一年の時の担任、久保田先生が三年でもまた、担任になった。一番、健一の事を心配してくれた先生だ。それも、教科は数学。そりゃあ、心配だったろうなあ。

健一にも、ちっぽけだがプライドがあった。落第だけは避けたい。なんたって、格好悪い。それだけの理由。親に迷惑をかけるなどとは、考えもしなかった。ここ一番では、頑張ったんだなあ。とは言っても、まあ、六十点半ばから、七十点そこそこだったが。

### 進路志望

二年生の時だっただろうか。担任と個人面談をした。いや、これは別に劣等生だけではなくて、全員だったと思う。もうすでにこの学校は、自分には向いていないと。ある意味悟った頃だった。(おおげさな)

いろいろと質問されて、将来は何になりたいか、と言う質問があった。産まれてから今まで、そんなことは真面目に考えたことがなく、日々楽しく暮らしていた健ちゃんである。

そうだ、楽しい事と言えば、写真だ。

「カメラマンです」

とっさにそう答えた。何の考えもなかった。私学の一貫校で、大学受験が専門の学校だ。そんな奴はいない。だいたい、どうすればカメラマンなどになれるのか、全くわかっていなかったのだから。まあ、先生も呆然としていた。呆れた様子は見せながらも、面談は続いた。何に興味があるか。どんなものに関心があるのかと言う質問が出た。小学校時代からそうだったのだが、本は好きだった。かなり読んで

いた。もちろん、勉強には全く関係のない本ばかり。そのころは、超古代史に興味を持っていた。超古代史。そんな分野などあるわけもなく、健一はとうとうと答え始めた。

「アトランティス大陸とかムー帝国とかです」

「はあ？」

「今よりも、文明が発達していたと思います。それと、ギリシャ神話の世界。キリスト教の世界観にも興味があります」

何を言っているのか、自分でも良く理解しないで、論じている健一がそこにはいた。先生も仕方がないと思ったのか、質問を変えてきた。

「志望する大学は？」

はたと困った。今まで一度も考えたことはなかった。そう、中学二年ともなると、皆すでに進学先を、考えていたのだ。健一は、全く考えていなかったことだった。

「特にありません」

即答に近かった。真実を言ったまでだった。

「そうか、わかった」

先生はそう言って、面談は終わった。まあ、ダメな生徒に当たっちゃったなあ、といったところだろうか。

### 文化行事

健一の言っていた学校では、高校では文化祭があるのだが、中学はそれとは別に、文化行事と称するイベントを行っていた。高校の文化祭は、華やかで楽しいのだが、文化行事は、いわゆる学習発表の場だったのだろう。ただ、模擬店なども少し出たと思う。

三年の時だった。やるからには楽しくなくちゃいけない。健一の、その意見に賛同した者は、少なくなかった。七、八名いただろうか。じゃあ、なにをやるか。一応、研究発表らしくしよう。テーマは何か？　すぐに意見は一致した。「ウルトラマン」だ。自分達の就学以前から小学校にかけて、心を熱くしたもので、そうだよ、「ウルトラマン」だよ。それからは楽しかった。いかに研究発表らしく遊ぶか。当然、当時の怪獣の人形やポスターなど飾りたい。文化行事の担当の先生に、どうやって「ウ

ン」と言わせるか。

実行委員の中にも仲間がいて、先生を説得する役目を担った。すったもんだはあったのだが、なんとかかんとか、出展できることになった。

当日、やんやの喝采だった。怪獣は並んでいる。絵やポスターは怪獣一色。みんな好きだったんだ。会場の隅では、「ウルトラセブン」のカラオケ。これには、夏休みの補習でお世話になった、モリ先生がのってくれた。やんやの拍手。人だかりの山。異色の空間と化した。本当は何をやりたかったのか、よくわからない。ただ、楽しもう、思い出にしようと、心の命ずるまま、やり遂げたと思う。まあ、行事の後に、あれは何だったのかと教員の間で、物議をかもした事を付け加えておく。

### 高校進学？

いよいよ、高校進学までいくらも時間がなくなってきた、中学三年の冬休み。二学期の成績で、健一は赤点をふたつ取ってしまった。三学期は、中間試験がない。三学期で二学期の赤点を帳消しにしなくては、高校へ進めない。一貫校だからと言って、容赦はない。とは言え、正月休みである。健一は当然休む。二週間足らずの、冬休みは瞬く間に過ぎ去って行った。

また、重苦しい日々がやってきた。ところがである。私学である学校は、毎年入学試験を行わなくてはならない。それが、二月の初めだった。およそ一週間、試験休みがあったのだ。これを見逃すはずがない。K駅利用仲間のA君とズレ、そして健一。二月の初めには、札幌雪まつりがある。幸いなことに、A君の親戚が、函館にいた。そこを頼りに北海道行きを企てたのだ。学校からは、くれぐれも出歩いて遊んでいないようにと、釘を刺されていた。しかし、そんなことはお構いなし。三人は夜行列車の旅人となったのだ。

初めての北海道は感動した。札幌の雪まつりも良かったのだが、函館が気に入ってしまった。朝市やレンガ倉庫、立ち並ぶ洋館や教会。今から四十年近く前、その当時は、観光ずれしていなく、素朴そのものだった。その後の健一への影響も多分にあった旅だった。

初めて乗った、直角椅子の夜行列車。ほとんど寝ないで（寝られないで）青森に着いた。そこから青函連絡船に乗る。実は、大しけでそれまで連絡船は欠航して

いた。北海道に渡れなかったら、青森を観て歩こうと決めていた。悪運はついていた。健一たちが乗った夜行列車に接続する連絡船から、出航することになった。そののち、何度か青函連絡船に乗ったが、あれほど揺れた経験はなかった。

こんな時は、赤点のことなど頭の片隅にもなかった。楽しい北海道の旅だった。

### 最後の難関

いくら楽しい事があっても、現実はやってくる。二月の半ば、健一は担任の久保田先生に呼び出された。要は、このままでは高校へ進めず、落第をしてまた中学三年をやらなくてはならないということだった。それは、健一にもわかってのことだった。やるしかない。先生の言葉には生返事で、心の中で覚悟を決めた。その時点で、赤点がふたつ。取りあえず、ひとつにしなくてはならない。確か、数学と地理だったと思う。数学は久保田先生の担当だ。意外なのは、英語じゃなかったことだ。しかし、逆に考えると、仮に英語でミスをする、即落第という可能性が待っているということだ。

健一が勉強をした。今までにないほどに時間をかけ、参考書を広げ（今まで見てもいなかった）勉強した。期間にすると、たかだか三週間くらいだったと思う。結果から言うと、健一は三年の終わりには、赤点がひとつもなかったのだ。数学も地理も英語も、みなクリアしたのだ。まあ、点数自体は、七十点前後がほとんどだったと思う。これで無事、高校へ進むことができることとなった。健一もさすがにまずいと思っていたのだ。落第だけは、避けなければならない。ちっぽけなプライドが、赤点を消してくれたのだ。

### 決着

無事、中学最後の春休みを迎えた。春休みの間も、せっせと遊んだ。級友たちとキャッチボールをした時などは、

「高校野球だな」

などと、笑っていたっけ。まあ、学校には、残念ながら硬式野球部がなかったのだが。

春休みは短い。なんとなく過ぎてしまった。気持ちだけは軽くなった、健一だった。高校一年の新学期は、金曜日から始まった。翌日の土曜日は午前中だけの授業だった。まあ、授業と言っても、先生が話をして、高校はこうなるとか、なんとなくそんな話をしたのだろう。

健一は、金曜日と土曜日の二日間学校へ行って、もう学校へ行くのを辞めた。誰にも、何も言わずに。